

●春日部市民文化講座（第 36 回） 「四季を愛でる侘茶 一千利休と弟子たちの茶の湯」

◆日時：2021 年 5 月 26 日(水) 10 時（ばばら春日部 4 階会議室）～12 時

■四季を愛でる侘茶 一千利休と弟子たちの茶の湯

今日は「四季を愛でる侘茶」としました。皆さんが三千家の茶の湯に触れていただくと、そこにはふわぁと四季の色合いというものが出てくるのです。道具にしても、懐石料理の素材にしても、お菓子にしても四季の先取りを出すのですね。日本列島は本当に四季感がはっきりしているのですね。そうしたはっきりとした四季感の中で、ぼくが一番好きなのは、その間なのです。今であれば、夏を前にして皆さんの家の周りの田圃には、苗が植えられ水が張られて、それまでの風情とは大きく違いますよね、そういう移り変わりの変化がぼくは子どもの頃から好きでした。ぼくは、**長野県安曇野、穂高町**で生まれ育ったのですけれども、極寒の時期には「今日は凍みますねえ」って言うのです。身体で感じる寒さですね、凍えて死にそうだという身体感覚の言葉ですね。山田牧師の田舎のお母さんの言葉にも身体感覚の表現がありました。ぼくが東京から新潟県上越市の高田までお土産を持って行った時に「切ないなあ」と言われたのです。それは「わざわざ遠くから、こんなにまでお土産を持って来てくださって、切ない気持ちになってしまう」という身体感覚の言葉、感情の言葉なのですね。最近はそのような言葉を聞くことがなくなりましたね。つまらないですね。これはテレビなどの映像が影響している弊害だと思います。ぼくの田舎の安曇野は、「♪春は名みの 風の寒さや・♪」で有名な『早春賦』が生まれたところで碑があります。あの歌詞は、ぼくの子どもの頃からの思いをしっかりと言葉にしていますね。凍みる空気の冷たさはあるけれども、春が来るんだなあという思いを感じ取ったものです。だから、冬から春に手がかかるか同化という季節が好きですし、今でもぼくは好きですね。春夏秋冬よりもその間に育った文化というものがいっぱいあると思いますし、好きなのですね。そういう四季を感じる身体感覚の文化が、侘びだとか寂びだとか言う前の子どもの頃から、ぼくであれば安曇野という土地で染みついてきているのですね。皆さんもそれぞれがお生まれになった土地での影響を受けて育ってこられたと思います。

■「侘び」と「寂び」の違い

「侘び」というのは、利休さんが茶の湯で表す形の美意識です。一方の「寂び」というのは、和歌とか歌の世界で磨き上げられてきた言葉の美意識なのです。今、「侘び」と「寂び」の違いを形で表すものと言葉で表すものの違いとお話しましたが、皆さんもよくご存じの「見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮れ」、新古今和歌集にある藤原定家の歌です。これは、江戸時代に書かれた『南方録』に、この歌が利休さんの師である武野紹鷗が「侘びの真髓」であるとしたものです。でも、利休さんが言ったことを集めたと言われていた『南方録』は、今では偽書であるとされていますが、消えていく見えなくなっていく世界の美しさを受取る歌ですね。花が散り、紅葉も散った秋から冬に向かう季節の感性を歌い上げてます。そういう感性を「侘び」と言って武野紹鷗は堺で利休さんたちに教えていたと言われていたのです。同じように『南方録』に、「花をのみ待つらん人に山里の 雪間(ゆきま)の草の春を見せばや」という藤原家隆の歌が利休さんの「侘びの心」ですよと紹介されています。ぼくは「花をのみ待つらん人に山里の 雪間の草の春を見せばや」という歌には希望があると思うのです。花・花・花という前に、雪間の草にも春の景色があるのですよ、という奥ゆかしさが入っているのですよ。

■四季感覚を失っている現代人

花だとか紅葉だとか、季節の移ろいだとか、季節感を大切にしてきた日本人なのですが、最近の人たちには四季感覚が失われてきているのではないだろうかと思っています。自分の日々の生活の中にも危機感を感じます。利休さんの時代でも、暑い寒い冷たい、そういうことに文句を言わないで受けとめて、それを共にすることが大切なのですね。日本文化では、今日は良い天気ですねえ、そして、明日雨になると、梅雨に入ったのですかねえ…と享受するのが日本文化なのです。ぼくが尊敬している先生は、ある人が「今日はお暑いですね」と挨拶したら「地獄よりも涼しいですよ」と返したのですよ。やるなあ…ですね。「侘びの極致」は、嫌なこととどう対面するかということだと思います。戦国時代の嫌な時代の中でも、利休さんは全てを受け入れて生きて行く生き方、そういう文化を「侘び」として創り上げたのです。ですから、犠牲になった人たちへの思いやりを利休さんの「侘び」には感じられるのです。「得よう、得よう」というのは不幸ですよ。利休さんの「捨ててこそ」とは対極ですね。茶室には入るためには何も持ち込めない仕掛け「躰り口」がそうです。武士の命である大小の刀さえも置いてお入りなさいですからね。

■利休さんの革命

利休さんは草案の茶室に、躰り口を設けました。高さ 2 尺 2 寸(約 66 センチ)、幅 2 尺 1 寸(約 63 センチ)くらい狭い入口です。帯刀のままでは茶室に入ることのできない大きさの入り口なのです。そして外に刀掛けを用意して、武士の命と言われる大小を取り上げてしまったのですから凄いですよね。戦国時代の革命ですよ。武士から刀を取り上げて、刀を持たずに敵味方が一座に会する文化を創り出したのです。

■侘茶は虚構か

もうお亡くなりになりましたが、東京国立博物館に長いこと勤めていらした陶磁器研究家の林屋晴三さんは、表千家の茶人でもいらっしゃるのですが、晩年に利休さんのように 100 回茶会をやってみたくてと言われてお茶会を開催されて、ぼくも 1 度招かれたことがあります。この方は「虚構説」を明確に唱えましたね。いわゆる「お茶会はバーチャルリアリティー」だとね。それに対して、表千家の茶人で建築家の中村昌男さん(故人)は「侘茶は事実を表現しているんだ」と林屋さんに対して「反虚構説」を唱えています。「林屋さん、あなたたちは何をとって虚構というのですか」という問いかけまでしているのです。皆さんはどう思われますか、今は茶の湯は、あなたが学んだ先生たちの茶は虚構ですか、本物の世界ですか、どちらですか？ ぼくにとっての礼拝は、見えない神様がぼくの前に存在しているリアリティーなのです。ですから、ぼくは禅宗のお坊さんが、警策で打たれるような礼拝の守り方はしたくないのです。僅かな時間ですが、緊張して礼拝を守っています。そうした時間は神様の「臨在感」というのですね、キリスト教用語ですが、こうして今も神様が居てくださる、導いてくださる、この講演を見守ってくださっているということなのです。そういうリアリティーを持っているのです。ですから、ぼくにとっての茶の湯は高山右近と一緒に、現実の日常生活、実際生活の中で表現できる生活の文化です。作り話の世界や小説ではないということです。

利休さんの話になりますが、利休さんが秀吉に切腹を申しつけられて死にましたが、利休さんの死は本望だったのでしょうか、あるいは縁起としての死だったのでしょうか？ これは難しいかもしれませんが、あなたが死ぬことに置き換えてみてください。人間は誰もが必ず死にます。その時に、最後に迎える大仕事の「死」、その時をどう迎えるか、ぼくたちが学んでいる「侘茶」に関わっているのです。すなわち「侘び」というのは、人の生き死にに関わっているのですよ。これは「虚構」ではないのですよ。「死」は現実なのです。「生きる」ことも現実なのです。その「生きる」中で、お互いに分かち合うおもてなしが「茶の湯」なのです。「侘茶」なのです。そうすると、やはりぼくは中村先生の「反虚構」の立場なのです。「虚構説」も面白いですが、確かにそういった面もありますが、「侘茶」は生き死にに関わるものなのです。ですから、茶室を造られる建築家の中村先生にとっては、まさに生き死にの場が茶室なのです。

■「待庵」と「如庵」

「待庵」が二畳、「如庵」が三畳台目の小間です。「待庵」は千利休の造りで、「如庵」は織田有楽斎の造ったもので現存しています。この「待庵」と「如庵」の凄さというのは何かというと、千利休が「待庵」を造った時に、茶室というハレの場に「死」という現実から逃れられないという仕掛けを作ったのです。それは生と死のコントラストです。炉を切り、お客様の前に「炭点前」を持ち出したことで人の最後である葬儀を持ってきたのです。「待庵」に隅炉を切ったことで「今、茶室で美味しくお茶をいただこうとしているけれども、ここにも『死』があるよね」というメッセージを送ったのです。戦国時代にその覚悟は如何にですよ。そういったことに気が付いた人は、利休の茶をやめることができなかったでしょうね。明日の我が身もしれない戦国時代で楽しくいただくお茶の席にも「生と死」の覚悟が問われていたのです。

■非対称の美

「生と死」の話は後ですが、その前に利休さんが「侘茶」で表現したのが、新しい美意識でした。日本文化では、対照的なものは昔からあまり作られてこなかったのです。どちらかというと非対称、いびつで歪んだものが日本人は好きだったのです。ところが、「唐物」と呼ばれる中国から渡ってきた物はシンメトリー、左右対象の物が良いとされていたのです。「唐物茶入」「天目茶碗」などは完全なシンメトリーです。室町時代までに渡来してきていた「唐物茶入」をはじめとした名物と呼ばれていた茶道具が、織田信長の「名物狩り」によって殆ど彼の下に集められました。そして、その披露の茶会が本能寺で開かれ、その夜に明智光秀の謀反によって全て焼き払われてしまいました。それが「本能寺の変」です。そのため、この世から名物が消え去ってしまいます。その時、利休さんは茶道具の大改革を行ったのです。今までの道具がなくなったのであれば、「自分で作ろう」というのが利休さんの凄いところですね。そして、皆さんもご存じのように長次郎に赤と黒の茶碗を焼かせたのです。赤茶碗もいいのですが、江戸時代から今日まで黒茶碗の方が格上だと言われてきています。こういうことも、いつ誰が格付けしたかは分からないのですが、長いことそう言われてきています。そして、この長次郎に焼かせた利休さんの「赤と黒」が、ぼくにとっては長いことの謎でした。

■縄文時代から続く美意識

ここで縄文人の季節感の話に移りますが、今日、皆さんの前に縄文土器の埴輪を持って来ました。コピーです。こうした埴輪や土器などをはじめとして、日本全国で縄文時代の文化がたくさん発掘されて見えてきました。何で突然に縄文時代の話に移ったかというと、縄文時代にも「生き死に」はあった訳です。縄文時代の埋葬というのは、瓶を逆さまにして亡骸を包んだそうです。これは、ぼくが写真に写してきたものですが、こういう習慣があったそうです。



この縄文文化というのは 1 万年以上も続いているのですよ。ぼくは、「三内丸山遺跡」で実際に見せていただきました。草で編んだ入れ物に漆が塗られている入れ物もありました。漆が塗られていたため土の中でも腐らずに現代に出土してしまったのです。これを見て凄く感動しましたね。また、九戸に行った時にも、赤と黒に漆で塗られた土偶がありました。あの辺りは、現在は二戸が中心ですが漆の生産地なのですね。何で器や土偶に赤や黒の漆を塗ったかという、長持ちさせて耐久性を持たせるための知恵でもあるのですが、赤は血液であり命の象徴ですね、そしてその赤が酸化すると黒くなるのです。黒は死なのです。こういうことを縄文人の文化から教えられた時に、ああぼくの牧師と

しての感性は間違っていなかったと思ったのです。それは、利休さんが何で長次郎に赤を焼かせ、次に黒を焼かせたのかということなのです。この動機は、15 代の直入の樂さんも持ってはいません。でも、ぼくはそこには「生と死」という大テーマが日本文化の中にはずうっと流れてきて、それが後世の文化の中で、葬儀だとかさまざまに表現され、戦国時代に堺の商人であった千利休に繋がり、彼が「ああ、そうか」と言って「生と死の文化」を「侘び」という表現方法で茶の湯の中に形作ったのだと思うのです。茶室、道具、作法、食を通して形作ったのです。

■利休さんの「侘茶」の究極的表現

晴れ着、晴れの日、晴れの門出などと「晴(ハレ)」の文化には皆さんも馴染みがあるでしょうが、「褻(ケ)」の文化についてはなかなか馴染みがないかもしれませんね。「褻」とはいむことであり、穢れ、汚い、汚れるなどですよね。その最たるものが「己が死」ですよ。その「己が死」さえもちゃんと受けとめる、それが利休さんの「侘茶」の究極的表現であり、利休さんが造った「待庵」という茶室には現れているのです。「待庵」には隅炉を設けて、晴の場に褻の死事を持ち込んだのです。ですから、利休さんは褻と晴とを同時に表現できるとんでもない人だったのですよ。茶室や道具で表現したのです。禅宗の哲学では敢えて言葉で言わないという哲学があります。茶の湯でもそうしたものがあります。「高橋さんのように、そうやってしまったらお終いだよ」という雰囲気が表千家にはあります。利休さんは、晴の茶室に褻の葬儀を持ち込んだ、しかも自分の葬儀の覚悟をもってそこに示したのです。それは、自分もやがて灰になる、消えていく、忘れられる、それでいいじゃないかという覚悟なのです。ただ、先ほどの「花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや」が利休さんの「侘茶」だよと江戸時代の人が『南方録』に書いたところは、利休さんを良く理解した人だと思っています。すなわち、**見えないもの、今すぐには手にできないものでも、いずれ来るであろう死でさえも、今この時点でちゃんと客観的に受けとめているのです。**そういう意味で利休さんは科学者ですよ。死さえも嫌だ嫌だと言っていないのです。四季を愛でるという中には、晴だけでなく褻もあるのです。

■歪(ゆが)みと歪(ひず)みを愛で

千利休が「利休居士」という名前を授けられる前は宗易と呼ばれていました。その頃に使っていたのは瀬戸黒の茶碗で、歪んでいる茶碗です。しかも長次郎が造る前に持っていました。これは後の人が銘をつけたのですが「小原木」という銘が付けられて、今日、表千家不審菴にあります。ある時、これとそっくりの茶碗を造ることを許された 10 代樂家の旦入(たんによう、1795～1854 年)が造った茶碗がぼくのところにきて、「高橋さん持っていたほうがいい」と言われてぼくのところにあります。長次郎の茶碗はシンメトリーではないけれども静かで穏やかではないですか、その前に利休さんは歪んだ茶碗もいいなあと思っていたという一つの証拠です。その後に古田織部が出てきて、歪んだ茶碗を多く世に出すのです。15 代の樂吉左衛門さんは、いろいろな茶碗を造って、今はその茶碗に相応しい茶室を佐川さんの後立てでできた佐川美術館に置いていますね。大きくて重くて評判は芳しくなかったのですが、彼は利休さんの「侘茶」から外れていない作品を造っていたのです。今は代を譲って「直入」と名乗っていますが、この後は静かで小さい茶碗を造り出すのではないかと思いますね。利休さんは 170 センチくらいの大柄だったそうですか、最初の頃は小さい茶碗や道具を造らせていたらしいのですね。そのほうがバランスがいいというのが彼の美意識だったのですね。こうした利休の影響を受けて、嵐のように世の中に影響を与えたのは古田織部でしょうね。だって、お茶をやらない人でも「織部焼き」を知らない日本人はいないですからね。織部の弟子が小堀遠州で、彼が桂離宮を造ったのです。その桂離宮に宮内庁が認めている 7 つのクリンタン燈籠があるのです。6 つは普通に見られるのですが、7 つめがどうしても見るできないので、施設の方に根気強く話したら、朝、お客様が来られる前にと行って見せてくださったのが、やんごとなき方しか通れない玄関の前にある築山に素晴らしい燈籠がありました。その小堀遠州は茶室、建物の中にも歪んだ柱を使ったりしていますが、利休さんの美意識が古田織部、小堀遠州へと繋がっていたのですね。

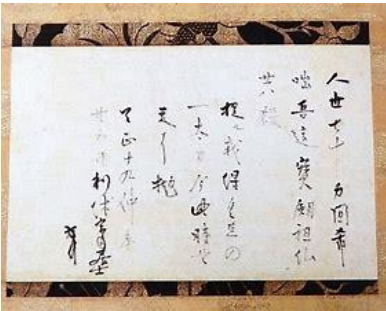


■人生の四季

四季を愛でるということは、人生の四季、誕生して少年、成年、壮年、老年という人生にも通じるのです。人生の四季は世界中で言われています。20 歳くらいまでの少年時代はまさに「青春」で、次に働き盛りの 40 歳くらいまでの成年が「朱夏」で、次が人生の使命を果たす壮年時代は収穫の時期「白秋」となり、そして成熟の時、老年は「玄冬」ですね。これはぼくの宝物なのですが、山居庵というところに飾ってある染め物で、芹澤銈介さん（せりざわ けいすけ、1895-1984）という染織家で「型絵染」で人間国宝になっていた方の作品です。ぼくはこの作品にシビれますね。このセンスは凄いですし、この人の弟子も凄いです。渡辺禎雄さん（わたなべ さだお、1913-1996 年）といって、キリスト教徒の版画家で、聖書の版画が有名でバチカンにも作品があります。



■千利休の遺偈（ゆいげ）



千利休は死を前にして仏教哲学を身に付けていた彼は句を遺しました。「千利休遺偈」といわれるものです。

「人生七十 じんせいななじゅう
力圀希咄 りきいきとつ
吾這宝剣 わがこのほうけん
祖仏共殺 そふつともめつす
提ル我得具足の一ッ太刀 ひっさぐるわがえぐそくのひとつたち
今此時ぞ天に抛 いまこのときぞてんになげうつ」

というもので、千利休が自刃するに際し、天正 19 年(1591)2 月 25 日にしたためた辞世の偈とされています。この遺偈を古筆学者で写本の筆跡の科学的分析方法を開拓されて博士号を取得された小松茂美さん（こまつしげみ、1925-2010 年）は次のように解説されています。「人生ここに七十年。えい、えい、えい！（忽然と大悟した時に発する声）。この宝剣で祖仏もわれも、ともに断ち切ろうぞ（まさに、活殺自在の心境）。私はみずから得具足（上手に使える武器）の一本の太刀を引っさげて、いま、まさに我が身を天に抛つのだ（いまや、迷いの雲も晴れた、すっきりした心境）。」[中公文庫 利休の死；小松茂美（中央公論社）]です。抛つというのは、天に任せるということだそうです。

利休さんは、節ではなく商人だったのに、秀吉に「切腹しろ」と言われて切腹して斬首、晒し首になったのです。でも、凄いののは利休さんの愚痴とか、恨み節とかが一切無いのです。子どもたちにも遺していないのです。ただ、聚楽第から淀川を下って行くときに、利休さんの弟子の古田織部と細川忠興が見送っているのですが、その二人に送った手紙が残っているだけです。見事に、別れについても、自分の死についても、ありのままを受けとめているのです。これが、「侘茶」という革命を起こした千利休の人生の四季の最後の描き方でした。

■茶の湯とは隣人を愛してもてなすこと

ここに、「認知症を自覚されて人生の結びの茶事をされた横山梯子先生」と書きましたが、ぼくの先生です。久田家の直属の弟子です。この先生が花の名前も、お点前さえも分からなくなっていたにも関わらず、ぼくたち弟子 10 名くらいを呼んで茶事をしたいとおっしゃいました。周りから見ると茶事を開ける状態ではなかったのですが、弟子たちに「これで良かったかしらね」などと言いながらも立派な茶事を行われました。ぼくはこの時に涙しながら感じたことは、茶の湯とは上手にすることではなく、大切なのは自分を愛し、自分を愛するように隣人を愛してもてなすことでした。その時のことを思い浮かべると涙が込み上げてきてしまうので、今日のお話はここまで、お終いです。

◆質問タイム

Q. 死を迎えるのも大変ですが、生まれることも大変な苦しみがあるのではないかと感じています。

A. 天正 10 年に本能寺の変があり、山崎の合戦が終わって、利休さんは二畳の「待庵」を造りました。そこでは全てを切り捨てたのです。一畳に利休さんが座ってもてなしをし、もう一畳に最大で 3 人が座りお茶を飲みます。利休さんは、そこに死にゆく時に一畳に横たわる自分と、点前座で看取る、もてなしてくれる誰かを見ていたのではないかと思います。これが「侘茶」の哲学であり、思想であり、そうした美意識があつた「待庵」に込められているのだと思います。表千家のお稽古は八畳間で立ち居振る舞いをしますが、茶室でなくても常に自分の死と向き合っていて、その時が訪れたら自分をもてなし、感謝してこの世とさよならができればいいなあと思っています。それがぼくの「侘茶」であり、四季を愛でることであり、自分自身の人生の四季を愛でることでもあると思います。

自分を愛し、自分の隣人を自分と同じように愛してもてなすことが「侘茶の真髄」、その通りでありたいものです！